

Oxfam
January 23, 2023

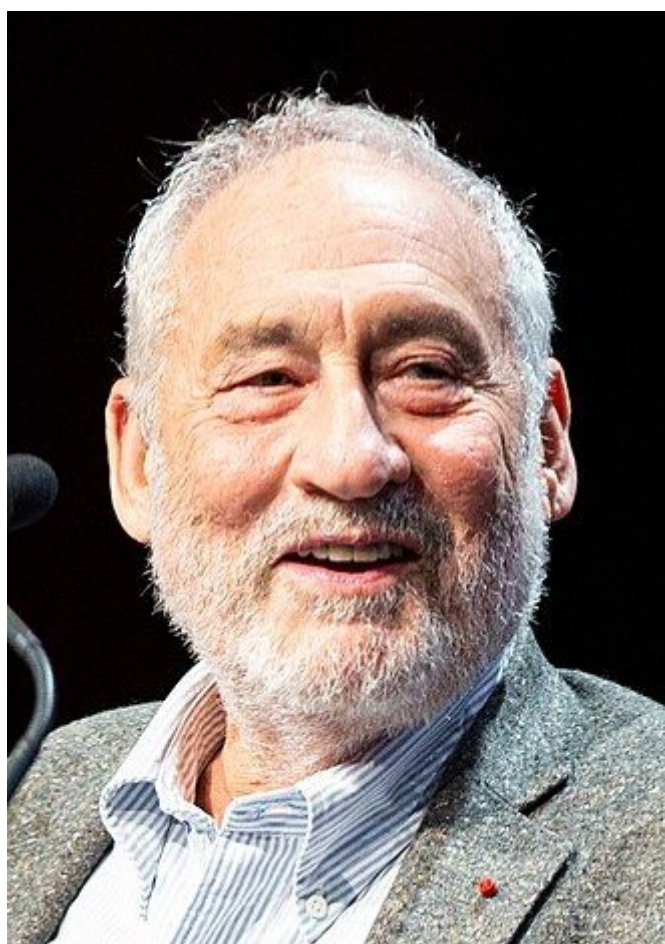
スティグリッツが不平等の現状を評価する

Checking in with Joseph Stiglitz on the state of inequality
<https://politicsofpoverty.oxfamamerica.org/checking-in-with-joseph-stiglitz-on-inequality/>

リード

ジョセフ・スティグリッツが、戦争による利益供与、格差の拡大を企む政治家、そしてさらに希望の源について語る。オックスファムのスタッフとの対話。

オックスファムの不平等に関する第 10 回年次報告書の発表に先立ち、スティグリッツと語る機会を得た。彼はグローバル化と不平等に関して語った。



今年のオックスファムのダボス会議報告書について

聞き手 B： オックスファムはダボス会議報告書を発表しましたが、富の蓄

積に関するショッキングな数字が目につきます。食料品やエネルギー価格が高騰しています。経済的不平等はどの程度深刻なのでしょう。

Stiglitz: 私はいつもみなさんの年次報告書を楽しみにしています。ズバッと物事が表現されています。

以前の報告書では、世界の富の半分を持つ全ての金持ちをバス一台に乗せることができると言っていました。その数年後には、バスは必要ない、ミニバンで十分だと言っています。それほどまでに格差が広がっているのです。

COVID-19以降、世界的な不平等が露呈しました。今それはますます悪化しています。まさしく異常な事態です。オックスファムの「不平等報告書」は、富裕層批判に焦点をあてています。

彼らのために多くの人々が職を失い、食糧や原油の値上げに直面して、非常に困難な生活を強いられています。そんな時代において、富裕な個人・企業がいかに強盗顔負けに儲けたことか、それは衝撃的なことです。

富の増大はまさに驚異的です。Oxfamのレポートから数字を拾いましょう。2020年以降に新たに生まれた富は42兆ドルに相当します。1%の富裕層は、その3分の2近くを握りました。これは世界人口の下位99%のほぼ2倍に相当します。まさに驚異的な数字です。

しかし、パンデミックとパンデミック後の世界は、事態をさらに悪化させました。私が最も怒りを覚えたのは、世界中の人々が原油価格の高騰に直面しているとき、石油会社やガス会社が何百億ドルもの大金を手にし、自社株買いや一時的な配当などに回していたことです。

このようなアコギな儲けに対して課税することで、富を共有しようという提案がなされました。その利益の源泉は、まずはウクライナでの戦争でした。しかし、その「超過利益税」が提案されると、彼ら（企業）は「とんでもない」と猛反対しました。ヨーロッパのいくつかの国は「超過利益税」を実施していますが、アメリカではやっていません。

「アメリカ復興法」の素晴らしい一瞬

聞き手 A: その通りです。ところで、今アメリカでは、事情が少し改善してきているのではないかという声があります。それにはどうですか？

Stiglitz: それについては、ちょっと話が入り組んでいます。

2021年、バイデンが就任してアメリカ復興法が成立した直後、素晴らしい一瞬がありました。1年間で子どもの貧困を40~50%減らすことに成功したのです。これは驚異的なことです。

それは、私が長い間言い続けてきたことを、事実でもって示してくれました。

不平等とは選択である。私たちは、その気になれば、いつでも子どもの貧困を40~50%減らすことができたのです。しかし、バイデン大統領のような人物と、パンデミックのような瞬間をともにしたからこそ、私たちはその選択の結果を共有できたのです。

しかしその後、共和党、民主党の一部さえも、「よし、もっと不平等にしてやれ」(let's have more inequality)と言ったのです。信じられません。

このようなやり方は、私たちの未来を危険にさらしています。なぜなら、貧困の中で育った子どもたちは、ものを生み出す力が低いからです。

また貧困は一方に不満をもたらします。不満は、政治や社会、経済にも悪影響を及ぼします。

私たちの社会で、多くの子どもたちが貧困の中で育つことは、愚かなことだと私は思います。

もうひとつ例を挙げると、私がひどいと思ったのは、FRBが「失業率を上げたい」と言い続けてきたことです。彼らは「それは多くの痛みを伴うだろう」と続けます。

もちろん、彼らは痛みを感じることはないでしょうが...

失業率を3.7%から5.1%に上げるというのは、一見小さなことのように見えます。それらはたんなる数字のように見えます。しかしそれは生身の人間なのです。

失業率を1.4%引き上げるとしましょう。すると、社会の底辺の人々、たとえばアフリカ系アメリカ人の若者では、失業率は5.1%ではなく、20%程度になります。そうなったら、私たちの社会はどうなってしまおうのでしょうか。

富裕層への課税は富裕層にとっても必要

聞き手 A: 極端な不平等と戦うためにできる選択肢の1つは、超富裕層への課税です。

というのも、世界の議論は「金持ちに税金をかけるべきか?」という問いかけでしたが、今は「金持ちにどれだけ税金をかけるべきか」という具体的な議論に移ってきているように感じるからです。

興味深い歴史があります。かつて米国は世界で最も累進的な税制を採用していました。1950年代から80年代前半にかけては、高額所得者の所得税率は平均で80%を超えていました。

超富裕層への課税率はどれくらいが妥当だと思いますか? 特に今の時代の億万長者には?

Stiglitz: 億万長者の多くは気付くべきです。彼らはその富の多くを運から得ていることを。

たしかに彼らは何か積極的に動き、何かを作り出しました。でも同じようなことをした人はたくさんいたのではないのでしょうか。例えば、Facebook や MySpace がそうです。たくさんの企てがあって、そのうちのひとつが当たるという、宝くじみたいなものです。

「いいね！」をクリックするとランクが上がるというアイデアを思いついたことが、結果的に大きなイノベーションであったと言えるかも知れません。しかしそんなことに 500 億ドル、1000 億ドル、1500 億ドルの価値があるのでしょうか？それは市場が決めた価格に過ぎません。

今度はイノベーターの立場になって考えてみましょう。

たとえばもし、1000 億ドルを手にしたのに、50 億ドルしか持ち帰られないとしたらどうでしょう。

私が思うに、50 億ドルや 100 億ドル以上の富の大部分を取り上げても、彼らはそれをやり遂げたでしょう...。つまりこれらのイノベーションの原動力は市場にあるのではなく、創造しよう、成功しようという意欲なのです。富裕層の富の源泉はもう一つあります。彼らのほとんどは、その富の何分の一かを他人の労働から得ています。時には市場そのものが合法的に取り立てることもあります。億万長者の中には、露骨に労働者を酷使し、嘘をつき、ごまかそうとする人もいます。

ですから、エリザベス・ウォーレン（民主党進歩派の上院議員）が提唱している富裕税は非常に合理的な税制だと思います。

（この案では、最も緩い場合、500 億ドル以上の収入に対し 1%、最も重い場合は 50 億ドルに対して 3%の税を課す）

そして、この国の問題を一部でも軽減できるようしなければなりません。それは本当に長い道のりを歩むことになるでしょう。

私は、事業家が事業を成功させることに反対しているわけではありません。社会がよりよく機能するように成功の分前を分かち合うのが願望です。

富裕税の最高税率は 70% くらいが妥当

聞き手 B: 確認したいのですが、具体的に最高所得者の限界税率についてです。過去には 90% 以上の税率が設定されたこともありました。今日、このようなパーセンテージは現実的なのでしょうか？

Stiglitz: 財政学のトップクラスの経済学者たちが、利害得失を慎重に検討した結果、このような計算がなされました。

課税を強化すれば、上層部の人々は少しばかり働きにくくなるかもしれませんが、しかし、その一方で、より平等でまとまりのある社会を実現することで、私たちの社会は利益を得ることができます。それがさらなる成長を促します。

ということで、労働所得については、70%の税率が合理的というのが、一般的なコンセンサスだと思います。もう少し高くてもいいかもしれませんが、あまり細かい議論は無意味でしょう。

しかし、ここで話しているのは、富裕税についての話でもあります。私の考えでは、富（資産）には所得よりもっと高い税率をかけるべきなのです。なぜなら富の多くは相続された富だからです。私の友人の一人は、これを「精子の宝くじ」と表現しています。

資産への課税税率は低すぎます。株式の配当への課税は最高でも20%の課税です。株の取引による利益（キャピタル・ゲイン）も低い税率しかかけられていません。さらにアメリカでは、資産を子供に譲れば、株式取引税はただです。まったくなんということでしょう。

中低所得国における富裕層をどう取り扱うべきか

聞き手 B: 億万長者について考えるとき、私たちはトップの富の集中について考えます。たとえばイーロン・マスクやビル・ゲイツを思い浮かべます。しかし、このようなグローバル・ノースの白人男性だけでなく、低・中所得国でも富が極度に集中しています。

そこでお伺いしたいのは、先進国以外でも富裕税による格差改善は実現可能なのでしょうか？

中低所得国では対外債務が山積みになっています。北側諸国からは緊縮財政の推進が押し付けられます。財政が逼迫している以上、政府は緊縮財政に走るしかありません。緊縮政策は明らかにエリートが押し付けたものです。また IMF という巨大な支配的外部勢力によって押し進められたものです。

しかし、中低所得国において富裕税は緊縮財政の代替案となりうるのだろうか、どれだけの効果があるのでしょうか。富裕層への課税はどれくらいの効果があるのでしょうか？

Stiglitz: ああ、莫大な範囲があると思います。まず国際社会がやらなければならないことは、途上国に作られた資産の隠し場所、タックスヘイブンを閉鎖することです。この存在のおかげで、どれほどの富が逃げ出していることか…。

次に中国やインドなど新興国の富裕層への課税です。そこでは、億万長者の数が凄まじい勢いで増えています。その気になれば、それらの国々は米国同様にビジネスマンに課税できます。

新興国では、多くの富が国をまたいだ「共同市場」によって生み出されています。それは発展途上国や新興市場における富の蓄積を促進するものです。同時にそれは隠れた汚職の温床です。

国は原理的に、国民がどこで所得を得ようと正当に課税することができます。タックスヘイブンに逃すようなことはしません。もちろん完璧にはできていませんが、もっと徹底するべきです。国際的な税捕捉能力は重要です。他の国にもさせてはなりません。

新植民地主義の残滓との戦い

聞き手 B: タックスヘイブンについて考え、その国際的な解決の方向に話が進んできました。

これからは解決の土台となる「多国間主義」について話を伺いたいと思います。

コロナのパンデミックの際、ワクチンに関する議論が闘わされました。あなたはとても大きな力を発揮しました。このような多国間協議の場では、貧しい国々が議論から締め出され、拳句の果てに不利な条件を突きつけられるということが多々見受けられます。

このような新植民地主義的なスタイルがいまだに残っていることに、私は驚きを隠せません。どうすれば、この時代遅れのやり方を変えることができるのでしょうか？

Stiglitz: 本当に良い質問ですね。あなたの言うとおりです。税に関する包括的な枠組みを作ろうとする努力は、より一層進んでいます。

しかし、貧しい国々はその場にいるのですが、その声に耳が傾けられることはありません。会話は、貧しい国の声が事実上聞こえないようにして構成されているのです。OECDの税制改革に関するイニシアチブの結果を見ても、それがよくわかります。発展途上国がどれだけの追加資金を得ることになるのかさえ公表しなかったのです。その理由は、予備的な計算をしたところ、途上国が手にするのはあまりにわずかな金額だったからです。だから、あなたが尋ねた質問「それをどう変えるか？」は正しいのです。

新しい地政学が生まれつつあります。冷戦時代には、第三世界の人々の心をつかむために、一種のライバル関係がありました。しかし、80年代後半に冷戦が終結すると、そのような競争はなくなりました。

新たな冷戦の時代に突入し、私たちは欧米の失敗を目の当たりにしている。一方でロシアのウクライナ侵攻を見ると、とても非道だと思う。発展途上国や新興国からウクライナへと、私が期待したような支援がなかったことは残念です。しかし、彼らの怒りは理解できます。

彼らは欧米諸国にこう言います。「COVID-19 で我々が死にかけたとき、あなたがたは知的財産を共有しようとしなかった。そして、今もその知的財産を共有しようとしなない。あなたがたは私たちの命よりもファイザーとモデルナの利益を優先した。そして今、ヨーロッパで戦争が起こった。あなた方は我々に支援を求めているが、我々は食料品や石油価格の上昇を負担するという代償を十分支払っている」

だから、その怒りはよく理解できます。

それだけではありません。金融政策を変更して、より高い金利を支払わなければならなくなりました。私たちの負債の多くはドル建てであり、その借金は膨らみ、金利は上がります。結局そうしなければ借金を返せないから、緊縮財政を強いられます。

新冷戦の新しい現実は、発展途上国にもっと注意を払うよう、米国とヨーロッパに強制するでしょう

。これが質問に対する答えです。

平等な世界のために何が必要なのか

聞き手 A: あなたがおっしゃることは、世界中で一緒に仕事をしている人たちから聞いた話と、本当によく似ています。

最後の質問に移ります。

あなたは不平等と立ち向かってきました。時には、非常に難しく感じることもあるでしょう。平等な世界のために戦い続けるために、何が必要なのでしょう？

Stiglitz: 私は、このような社会的不公正が存在する世界を受け入れることができないのです。より良い世界を作るために自分ができることをしていないと思うと、夜も眠れなくなります。

歴史的に見れば確実な進歩があったと思います。2 歩進んで 1 歩下がるという感じもしますが。

『グローバル化と不満』(*Globalization and Its Discontents*) を書いたころは、IMF や緊縮財政を批判していたがもっとひどい状況だったと思う...

今、格差社会がより注目されています。

危機の中で資本市場を運営するためには、資本への規制が最善の方法かもしれないという発想があります。それと裏腹の関係で、緊縮財政は痛みを伴い、成長はおろか債務の支払いにも逆効果ではないかとの認識もある。「債務の持続可能性」(debt sustainability) というような新たな技術的発想についての新しい知見も蓄積しています。

私は、進歩や理性、進歩を信じる啓蒙主義に傾倒しすぎているのかもしれない...

私は、かなり学術的な観点からこの問題に取り組んでいます。私は啓蒙主義的な価値観を強く信じています。もし共同で論理を立て実証するならば、理性と道徳的善性、つまりアダム・スミスが『道徳感情論』で語った共感が、私たちを正しい方向へ導いてくれると信じています。

聞き手 B: 我々は世界の状況について考える厳しい一週間を過ごしてきました。その中で今日の話は貴重なものでした。

相変わらず、あなたはとても刺激的で、勇気を与えてくれました。

今日も時間を割いていただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。